

子育て支援活動『たち』に関する一考察

—活動報告と今後の課題—

鈴木方子

Study of the Child Care Support Group 『Touch』

— Report and Assignment —

Masako SUZUKI

はじめに

少子化の急速な進行、核家族化、また地域社会の人間関係の希薄化等の理由により、育児に不安を持つ母親の増加や子育ての孤立化、子どもへの虐待などが大きな社会問題となっている。そういった状況に対応するため、子育てを社会全体で支援することが求められている。1994年のエンゼルプラン、1999年の新エンゼルプランをはじめとする育児支援政策の策定以来、各自治体でも地域子育て支援センターの設立や保育サービスの充実等さまざまな活動が展開されている。また子育ての負担感は、男性より女性の方が、また共働きでない場合の方が強いことが平成12年度「子育てに関する意識調査事業調査報告書」(財団法人子ども未来財団)に示されている。これまで働く母親への支援が第一に考えられてきたが、今後は専業主婦として家で子どもと過ごしている母親への支援も重要な課題である。

このような現状をふまえ、2004年5月より筆者は大学において、付属幼稚園と共に子育て支援活動を開催している。地域に開かれた大学を目指し、また小学校教諭、幼稚園教諭、保育士を養成している児童教育学科の専門性を生かす上でも重要な活動である。さらに学生にとっても子どもや保護者とふれあう経験ができ、そのことは専門性をもった保育者を養成する上でも貴重な体験となると思われる。

今回は大学における子育て支援活動の2004年5月から7月までの活動をまとめて報告し、今後この活動をどう展開していくか、また保育や子育て支援における大学の役割、さらには地域に開かれた大学をどう育てていくべきかを考えるための資料としたい。

1. 開催の動機

筆者は1999年5月から2003年3月までの4年間、子育て支援サークルの主催・運営にあたってきた¹⁾。その中で場所の確保がいつも課題であり、参加する母親からは「いつ行っても誰かがいて、ほっとする場所があればいいのに」という意見が聞かれた。当時は学習塾の空き時間に部屋を借りており、活動時間以外は乳幼児と母親の立ち入りはできなかった。ある母親は「ベビーカーで教室の前を通ると、降りて遊ぶと言って大泣きするので普段は通りません」と語り、母も子ども居場所を求めていることを感じさせられた。

このような経験をふまえ、大学の空き教室を利用することで地域の親子の居場所になれば、大学の地域貢献という視点からも意味がある活動と思われ、開催へ向けて動き出した。

なお乳幼児がはいはいからたっちしてあんよをするという発達のプロセスと、ふれあうことの大切さをこめてこの子育て支援活動を「たっち」と名付けた。今後この活動を『たっち』と表記する。

2. 子育て支援活動『たっち』の目的

- ① 主に0歳から3歳までの幼稚園に就園前の親子が集う場所を提供する。
- ② 遊びを通して子ども同士の間人間関係を育てる。
- ③ 親同士の間人間関係を育て、子育てについて学びあう。
- ④ 専門性を生かし、しつけや発達についての相談に応じる。
- ⑤ 地域社会への貢献とともに、地域住民に名古屋女子大学を理解してもらう機会とする。
- ⑥ 学生にとって実際の親子とふれあい、現代の子育てを学ぶ機会となり、成長する場とする。

以上が当初に掲げた目的である。大学での保育集団活動についての先例として吉川らは、日本保育学会のシンポジウムで「地域の親子が参加し、子ども集団、親集団、指導者集団の3者が相互にかかわりあいながら、子どもも親も指導者（学生も含む）が共に成長していくという理論と方法が編み出されていったのである」と大学における子ども・親・学生参加の保育集団活動について述べている²⁾。

吉川らの活動は20年余りの歴史をもち、そこから学ぶことも多い。吉川は幼児グループの活動を「ひとりひとりが伸びることにより集団全体が発展し、集団全体が発展することにより、ひとりひとりが伸びていくこと、それが基本原理なのである」³⁾と関係学を基盤にその理論をまとめている。またこの活動を「児童学実習」という家政学部の授業として位置づけていることも今後の『たっち』の活動を考えていく上での参考になるとと思われる。

3. 活動内容

今年度は原則として毎週水曜日午前10時30分から12時まで大学と付属幼稚園において計35回開催する予定であった。しかし大学を中心に近隣に新聞折込でパンフレットを配布したところ、定員親子30組という枠に137組の応募があった。抽選等で対象者を限定するという方法もあったが、とりあえず今回は地域における子育て支援活動へのニーズが高いという理解の下、説明会には応募者全員に参加してもらうことにした。そこで7月まではとりあえず6グループに分け、隔週で参加してもらう形をとった。

スタッフは筆者が中心となり、学科の教員には自由に参加してもらうこととし、児童教育学科の学生には参加を呼びかけた。

活動内容は、あそびを中心にして人間関係を拡げることができるように、あそびの中に絵本の読み聞かせ、手遊び、音あそびなどを取り入れ、子どもが自由にあそべる環境を設定することが基本である。母親は子どもと一緒にあそんだり、子どものあそびを見守り、母親自身も学ぶことができる場とする。まずは指導者が母親に活動の意味を伝えていくことが重要である。また七夕や運動会などの行事を幼稚園で楽しみ、幼稚園就園への期待も育てる。そういった活動を積み重ねることにより、子ども同士の関わりを育て、親同士も関係を育てて行く場にしていく。またしつけや発達についての相談に応じ、保護者にとっても安心できる環境を提供する。

なお『たっち』の運営に関しては運営委員会を立ち上げ、そこで議論していくこととした。

4. 日程と参加者

日付	グループ	参加者 (組)	教員等 (人)	学生 (人)	場所	活 動 内 容
5/19	全員	119	7	12	幼稚園	説明会
6/ 2	たんぽぽ 1	16	3	2	幼稚園	はじめまして・自己紹介
6/ 2	たんぽぽ 2	16	3	5	幼稚園	〃
6/ 2	はいはい	27	7	4	大学	〃
6/ 9	あんよ 1	23	2	4	大学	〃
6/ 9	あんよ 2	18	2	4	大学	〃
6/ 9	あんよ 3	12	3	5	大学	〃
6/16	たんぽぽ 1	15	3	4	幼稚園	体をつかったあそび
6/16	たんぽぽ 2	14	5	4	幼稚園	〃
6/16	はいはい	25	3	5	大学	うたあそび
6/23	あんよ 1	19	3	5	大学	〃
6/23	あんよ 2	16	3	10	大学	七夕製作
6/23	あんよ 3	9	3	3	大学	〃
6/30	たんぽぽ 1	13	3	2	幼稚園	〃
6/30	たんぽぽ 2	14	4	3	幼稚園	〃
6/30	はいはい	24	3	4	大学	〃
7/ 7	あんよ 1	22	4	6	大学	七夕
7/ 7	あんよ 2	17	3	6	大学	〃
7/ 7	あんよ 3	9	4	3	大学	〃
7/14	たんぽぽ 1	15	4	4	幼稚園	うたあそび
7/14	たんぽぽ 2	17	4	6	幼稚園	〃
7/14	はいはい	21	5	3	大学	〃
7/21	あんよ 1	20	8	3	幼稚園	体をつかったあそび
7/21	あんよ 2	15	8	4	幼稚園	〃
7/21	あんよ 3	7			幼稚園	(あんよ 1、2と合同)

- ・グループ分け たんぽぽ 1、たんぽぽ 2・・・2 歳児
あんよ 1、あんよ 2、あんよ 3・・・1 歳児
はいはい・・・・・・・・・・0 歳児

5. 活動内容

- *5/19『たっち』説明会
プログラム
10:00～ 受付
10:15～
学長先生のお話
園長先生のお話

うた 手をたたきましょう・いっぽんばし

『たち』の説明

パネルシアター「はらぺこあおむし」

各グループに別れ、グループごとに申込用紙、アンケート、おみやげをもらう

たんぽぽグループは2階の会場を見学

*各グループの活動内容

あんよ3グループの活動の流れを以下に記述する。

6月23日 13:00~14:30 あんよ3グループ出席9組

スタッフ 教員等3名 学生3名

13:00 入室する

出席簿に印をつけてもらい、子どもは母親と一緒に出席カードにスタンプを押す。そのあとおもちゃで自由にあそぶ。

13:30 行進とあいさつ

おもちゃを片付ける。母親と手をつないだり、抱っこしてもらって音楽にあわせて行進する。音楽がとまると動きを止める、反対に動く、また音楽のリズムに合わせて走ったりゆっくり歩いたりする。学生は二人一組になってトンネルをつくりその中を親子が通る。行進の後自由に動きながらお互い全員にあいさつをする。母親は子どもを抱っこして、わらべうた「この子はいらん子」のリズムに合わせて体をゆすったり回転させる。

13:40 ふれあいあそび

輪になって座り「ありさんのおつかい」「おはながわらった」などの歌を子どもとふれあいながら歌う。くすぐったり、抱っこしたり母親のひざに座りながら過ごす。スタッフがうさぎの指人形を手を持ちながら、歌に合わせて子ども一人一人の名前を呼び、子どもと握手をする。名前を呼ばれても知らん顔の子やうさぎに走り寄ってくる子などさまざまであるが、一人一人に応じた対応を心がける。

13:50 七夕製作

きょうは母親には七夕飾りの製作をしてもらう。その間子どもはスタッフや学生と遊ぶ。2度目の活動で母子分離がうまくいくか心配したが、同じ部屋にいたので子どもが泣くこともなくスムーズであった。遊びながら「ママ」と母親のところに行ってまた帰ってくることを繰り返す子や、母親と一緒に折紙を折ろうとしている子、好きな車のおもちゃで遊んでいる子等その姿はさまざまであった。母親には部屋の隅のテーブルに折紙でつくった切子や本を置いておき好きなものをつくるように指示をし、スタッフは見守るだけにした。「子どものことを気にしないで何かできるなんてうれしい」「自分の子を見ててくれる人がいることが安心」など製作をしながらしゃべっている母親の声を聞くことができた。

14:15 パネルシアター

おもちゃを片付ける。母親も製作終了。親子で一緒にすわって「げんこつやまのためきさん」「たなばた」の歌を歌う。スタッフの演じるパネルシアターを親子で見る。

14:20 おやつ

学生がおやつ、お茶を配る。いただきますをしておやつを食べる。

14:30 さようなら

次回笹飾りをもちかえることを伝え、さようならのあいさつをする。

6. 活動内容の検討

各グループ4回、計23回の活動を当初の目的にあげた視点から検討してみることにする。

① 場所の提供

初回の母親(1名祖父)の自己紹介から「子どもを友だちと遊ばせたい」という声が多かった。公園に行っても子どもがおらず、ベビーカーに乗せて行ったり来たりという毎日であり、どこか遊べる場所が欲しいという声もあった。活動内容に関わらず「親子で遊べる場所の提供」という点でも『たっち』の存在意義は大きい。

② 親子にとって

子ども同士の関わりが生まれるという点も重要である。最初は母親にしがみついていた子どもも、おもちゃを目の前にすると少しずつ母親から離れて遊び始める。母親も少し子どもから離れて子どもの遊ぶ様子を目にすることができる。すると他の子どもの動きを見つめる子どもの様子や、おもちゃを取り合ったり泣いたり怒ったりする子どもの姿が目に入る。また月齢の違う子どもの姿を見ることによって、子育てに見通しを持ったり、わが子の発達を確認することができる。子どもが親から離れて親の目の前で遊び、その活動の意味を親に伝えていくことが親子一緒に活動を支援する上での基本だと思われる。それにより親は客観的に子どもを見ることができ、子育てについての学習を深めることができよう。

③ 親にとって

子ども同士を遊ばせたいという母親であるが、母親同士の関係作りも重要である。自己紹介をしてみて初めて近所に同じ年齢の子どもがいたことに気がついた等、ここでの出会いをきっかけにお互いの家を行き来する関係も生まれている。また親にとってはわが子以外の子どもとの関わり、またわが子とスタッフや大学生との関わりが新鮮に写るようである。ボランティアとして関わる学生に自分の学生時代を重ねてみたり、感謝の気持ちをもったりしている。

音楽療法を体験した回では、母親自身が楽しむことが大事との思いから、ハンドベルやトーンチャイムなどの楽器を演奏する時間を設けた。子どもはその間学生が見守り、自由に遊んでいる。仲間と良き理解者に支えられて母親が母親であることと自分自身であることを見つめる作業ができるようになることが大切である⁴⁾。

④ スタッフにとって

スタッフは筆者と他1名が常に参加し、幼稚園で開催の場合は筆者と幼稚園から2名が参加した。それ以外に教員は適宜それぞれの目的をもって参加した。またボランティアとして音楽療法士、幼児体育の講師に各2回ずつ参加してもらった。今後子育て支援を中心にした専門職としての連携も視野に入れて考えていきたい。

原田は子育て支援には従来の手法は通用しないと述べている⁵⁾。従来の手法とは問題のケースに直接専門職が関わるというモデルで、現在求められている支援は「子育てという“日常の営み”に対する支援である」ので行政や専門職が主導するのではなく、親を運転席に、支援職は助手席にという新しいスタイルが必要であると提案している⁶⁾。この提案は今後我々スタッフの役割を考える上で示唆に富んでいる。

⑤ 大学にとって

大学構内にベビーカーに乗った赤ちゃんや親子連れが行きかうことは学生にとっても新鮮な

ようだ。段差や階段、扉の開閉で苦勞している母親に手を貸す場面が見られるようになってきた。

当大学出身の母、付属幼稚園出身の父母、大学グラウンド、校舎の目の前に住んでいる母等、『たっち』に参加する以前から当大学との関わりを意識している参加者もいれば、近くにいながら知らなかったという参加者もいた。今後この活動を契機にして、地域との連携が進んでいくように活動を展開していきたい。とりあえず10月の大学祭で昔の遊びを体験するコーナーや子供服販売の企画を学生が立て、パンフレットを配布済みである。

⑥ 学生にとって

学生には観察記録を書かせているが、乳児とのふれあいは初めてという感想が多い。しかしその中で学ぶことも多々あるようだ。以下は学生の参加記録から一部を抜粋したものであるが、母親と子どもとの関係について率直な感想を述べている。

<取り組み状況> 2004.6.16 たんぽぽ1グループ

今回体験させていただいた『たっち』では対象年齢が0歳～2歳児ということで、幼稚園実習とはまた違った保育に触れることができました。特に母親と一緒にいる活動であったため、子どもだけでなく、母親と子どもの関わり方についても学ぶことができる場であると感じました。今日の観察で一番強く感じたのは、子どもにとっての母親の存在の大きさです。私は子どもが笑顔を見せる時というのは楽しい時ももちろんですが、それ以上に嬉しさを感じる時ではないかと感じました。実際今日の体操でも、子どもが笑顔になるのは、必ずといっていい程母親と触れ合う瞬間からであったように思います。そう考えると、子どもの表情は、母親との関係を映し出すところでもあるように感じます。(母親だけではないと思いますが。)特にまだ言葉の思い通りに発することができない時期の子どもにおいてはその表情をよく見て、子どもの欲求を満たしていくことで信頼関係が築かれるのではないかと思います。

今日の体操は母と子どもの信頼関係を築きながら、子どもが楽しく発達できるよい機会だと感じました。フープ、音楽、お手玉などの遊具も、子どもの発達段階を理解して取り入れれば子どもの興味に合った遊びが展開できるということが分かりました。また、遊具がなくても、走ったり、体と体の触れ合いによって楽しい遊びになることが分かりました。大切なのは、子どもが楽しさ、嬉しさを感じられるような環境をつくることだと感じました。

<反省・次回への課題> 2004.6.16 たんぽぽ2グループ

今回はもっと自分が楽しもうと思いました。親子ということもあって、どこまで子どもたちと触れ合ってよいのかが分かりませんでした。でも子どもたちと同じことを真似してやるうちに、自分が楽しんでいることが少し分かり、そうすることでだんだん子どもたちの気持ちに近づくことができました。だから今度はもっと自分が楽しく遊ぼうと思います。また次回は0歳児を抱いてみたいと思いました。見ていて懐かしい気持ちになりました。

幼児保育学専攻の学生の基礎造形の授業と連携して出席カードを学生手作りのものにしていく。カードにはそれぞれ消しゴムで作ったスタンプもついている。これが学生と親双方に好評であり、学生からは「私のつくったカード喜んでくれたかしら」親からは「手作りのカードがうれしい」と毎回出席時に親子でスタンプを押すことを楽しんでいる。

7. アンケートより

『たっち』開催にあたって、説明会時と7月にアンケートを実施した。集計結果は次回の課題とするが、今回は自由記述欄から母親の思いを探ってみることにする。

<説明会でのアンケートより>

環境

- ・家庭とは違う環境（遊具・お友達・先生・広い遊び場等々）の中で年齢に沿った様々な体験が出来ることを楽しみにしています。
- ・様々なジャンルの絵本を紹介してほしいです。
- ・いろんな手遊びや歌を教えてください。
- ・大学生と子どもたちで活動する時間ができればいいなあと思います。
- ・楽しいだけでなく実のある会を期待している。

親

- ・同じ位の年齢のお子さん方をもつお母様方とも育児の相談をしたり、お話を伺ったりできることを期待しています。*
- ・親子で楽しく参加できる教室であってほしい。*
- ・子どもとのスキンシップのとり方や成長していく段階でしてあげるといい事、悪い事など。
- ・親と離れることに慣れさせたいし、親のくつろぐ時間を2,30分設けてほしい。
- ・専門的な育児や子どもの発達についての話を多く聞ければと思っています。

子ども

- ・同じ年頃の子ども同士のふれあいや、大人とのかかわりを楽しみにしています。*
- ・子どもがのびのびとできるように何か手助けしてもらえたらと思います。
- ・子どもの自主性、友達と共に学ぶ協調性を期待したいです。
- ・今までは親子ばかりで遊んでいたのが同年齢の子どもたちと遊べるようにして頂きたいです。
- ・子ども達だけの交流をさせてみたい。
- ・パワフルな男の子、公共の場でのメリハリをつけさせるのが私の今の課題です。
- ・好奇心旺盛な子なので、いろんな人と関わったりいろんな経験をさせてあげたいです。
- ・子どもの発達を伸ばすような環境であればうれしいと思っています。
- ・この年齢の子どもはどこまで一人でできなくてはいけないのか等教えて頂きたく思います。
- ・多くの人と関わるのにまだ慣れず、とまどってしまう子どもでも、自然に慣れて楽しく参加できるようになる環境であることを期待します。

その他

- ・託児所のあるスクールやセミナーがないので、そのようなものができるといいと思います。子育てが一段落して、自分の時間ができた時、働きたいと考えるお母さんも多いはず・・・。
- ・（幼稚園）入園へのステップで集団での行動に慣れてもらいたいです。*
- ・幼稚園入園時の慣らし保育のような感じだと子どもにとって良いなあと思います。
- ・就園前にいろんなお友達と接し、みんなでいっしょにあそんだり、あいさつをしたり、お約束を守るなど少しでもできるようになればいいと思います。

〈7月のアンケートより〉

- ・家ではできないことがいろいろできて楽しく過ごすことができた。
- ・のんびり参加できるので大変よかった。
- ・体操がよかった
- ・体を使った遊びがたくさんあるといいです。
- ・子どもが真似して踊れるようなダンスを教えてください。
- ・親子で楽しめる体操などを教えてください。
- ・始まり終わりに決まった歌があるとよい。
- ・子育ての相談ができればよいと思います。もっと発達や専門的な話もききたいです。
- ・ママ友達をもっとつくりたい。
- ・学生の方もとても親切で有意義な時間を過ごさせて頂いています。
- ・学生さんがもっと積極的に参加してくださるとうれしいです。
- ・もっと回数を増やしてほしい。
- ・来年も続けてほしい。
- ・今のままでお願いします。
- ・幼稚園の七夕まつりに参加させて頂き、先生と園児がふだんから慣れ親しんでいる様子が拝見でき、共感できた。

(*印は複数意見あり)

参加前のアンケートでは特に子ども同士のふれあい、交流を求める声が多かった。子どもが何かできるように、身につけてほしいといった親の期待がそれに次いだ。それと2歳児では幼稚園就園に向けて子どもに慣れてほしいという意見が複数聞かれた。幼稚園との共催であるのでそれも当然であろう。お願いとして「せきや鼻水が出るときはお休みするように先生から伝えてほしい、親同士では言いにくい」との意見があった。そういう経験をした人の意見であろうが、親同士の関係を形成していくことの難しさを感じさせられた。

参加した後の回答には体操やダンスなど具体的にやってほしいことが書かれている。また子育て相談、専門的な話が聞きたいという声があったが、それについては時間的にも人数的にも質問されれば答えるという形でしかできなかった。これでは親に対しての本当の意味での支援とはよべない。専門性を生かしていくことがこれからの課題である。

今後この母親のニーズをどう生かしていくか、母親の就労状況など地域の特性も考慮に入れながら望ましい方向性を見出していきたい。

8. 今後の課題

第一に考えなければならないことは、参加者数である。地域のニーズがあるからとの思いで受け入れたが、隔週3グループの運営は個々への関わりが満足にできない状況を生み出した。さらに大学としての専門性をどこに置くのかということである。活動内容についての研究、専門職としての関わり方、具体的には特別な支援が必要な子への対応、個別相談の実施等を理論化していく必要がある。

学生の参加についても事前指導や反省会の定期的な開催に加えて、学生として何を学ぶかの指導が重要である。ここでの経験が学生が保育者になったときに生かされるような参加方法を工夫していきたい。また学科のカリキュラムとの関連も協議していきたい。

地域との連携も大学の将来構想を考える際避けては通れない課題である。

大学のあるN市A区では子育て支援活動が創造的に展開されているとの報告がある⁷⁾。今後行政の施策との関係や地域の子育て支援活動の調査研究を進め、それらとの連携も視野に入れて活動を展開していきたい。その中で大学の専門性を生かした子育て支援とは何かを追究し、地域におけるモデルとなるような活動を模索していきたい。

まとめ

表題にも記したように今回は『たち』の活動報告が中心である。活動の内容を検討する資料として3ヶ月の活動状況をまとめることにした。現実に親子に関わる中で、数多くの課題を見つけることができた。子育て支援活動を考える時、少子化問題も避けては通れない課題である。現代社会に生きる我々が、眼の前の子ども、親にどう関わっていくのか、この状況をどう受け止め、未来に託していくのか、それによって子育て支援活動の内容も様々な展開がなされるであろう。池本は少子化対策を講じることの意味を「子どもを通じて人々がつながり、将来の社会をよりよくしていくといった意欲に満ちた社会へと変えていくことにあるのではないか⁸⁾」と捉えている。将来を担う子どもたちに今我々ができることは何であろうか。

『たち』の活動は始まったばかりであり、さまざまな課題を研究、協議しながら地道に活動を積み重ねていきたい。

参考文献

- 1) 鈴木方子「ともだち広場活動の記録と今後の課題」愛知教育大学 幼児教育研究 第9号(2000)
- 2) 吉川晴美 武藤安子 畠中徳子 佐藤啓子「共に育ちあう子育て・保育・発達支援の展開—大学における子ども・親・学生参加の保育集団活動から—」日本保育学会第57回大会発表論文集(2004)
- 3) 吉川晴美「幼児グループの理論と方法—子育て・発達支援—地域に開く大学として共に育つ保育活動から—」第1巻 東京家政学院大学(2001)
- 4) 垣内国光・櫻谷真理子「子育て支援の現在」ミネルヴァ書房(2002)
- 5) 原田正文「子育て支援とNPO」朱鷺書房(2002)
- 6) 同上
- 7) 勅使千鶴「子育て支援に関わる活動のネットワーク化に関する研究—名古屋市A区の子育て支援の事例研究を通して—」日本保育学会第57回大会発表論文集(2004)
- 8) 池本美香「失われる子育ての時間—少子化社会脱出への道—」勁草書房(2003)

